

古医書『外科細壘』の書誌的考察

飯島裕三

はじめに

数年前、古書展で一冊の小さな和本を目にした。横本仕立て、題箋は摺り題箋で『外科細壘 下』とあり、下巻のみの端本ではあるが、中を見ると、内題に「外療細壘」とある。〔注1〕本文は漢字カタカナまじりの製版本で、傷の治療方法や薬の作り方、服用方等が記されている。しかし最終丁の刊記の部分に強く心惹かれた。そこには

慶長十一丙午歳十月十六日

鷹取甚右衛門尉藤原秀次

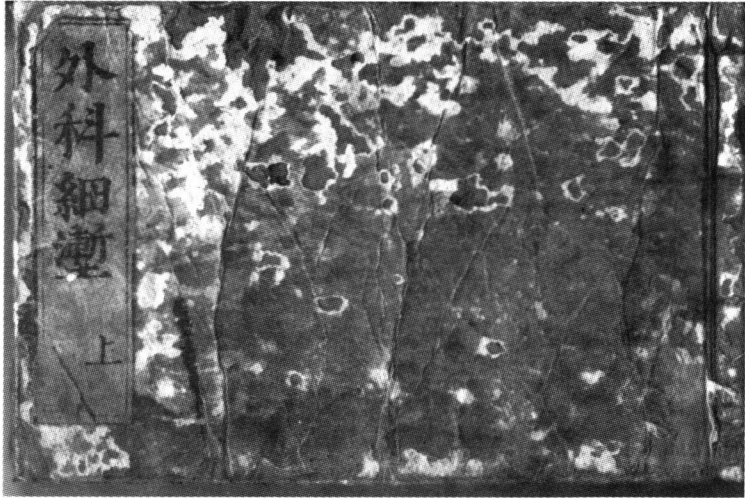
寺町通松原上ル町

菱屋 治兵衛

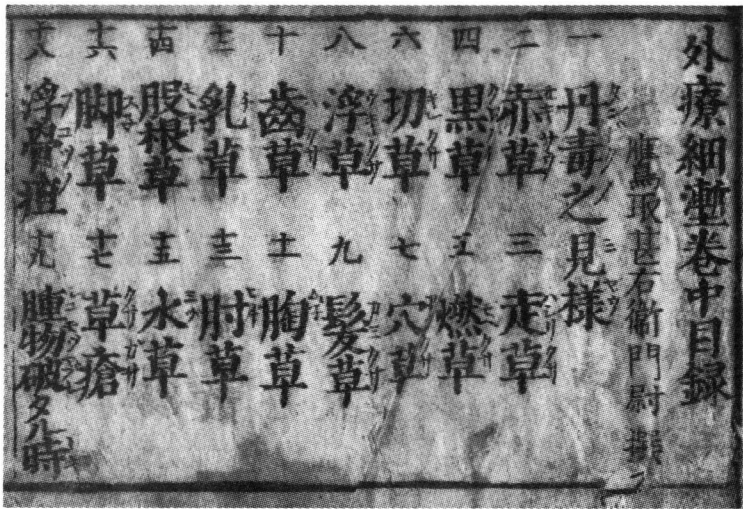
とあったからである。(次頁・写真参照)

菱屋治兵衛は書肆の名だと考えられるが、慶長十一年(一六〇六)といえは江戸もごく初期に属し、この時期の刊本の特色は、いわゆる古活字版と呼ばれる木活字を組んで印刷されたものが多い。当時の古活字本の刊行には医家の活躍があったことはすでに川瀬一馬氏の研究によっても明らかにされている。川瀬氏のまとめられた「古活字版刊行記集」を見ると、慶長元年(一五九六)から慶長二〇年(一六一五)までの一三八種の古活字版出版物のうち五五種類が仏書であり、それに次いで二四種が医書である。〔注2〕この時代にも当然のことながら人々の

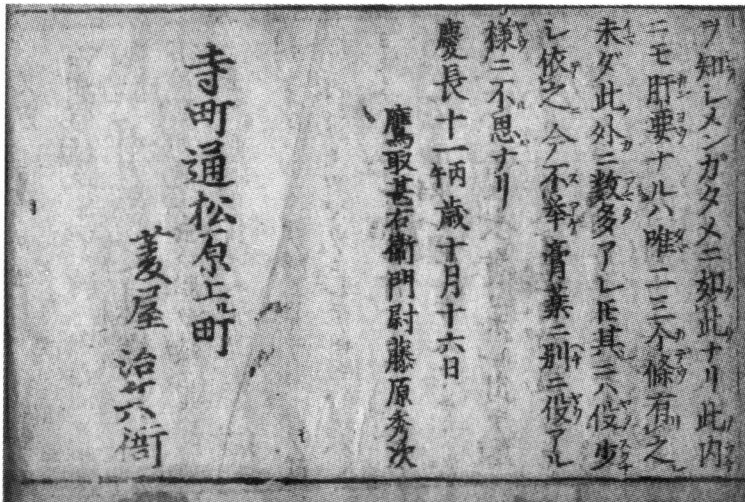
上卷・表紙



中卷・内題



下卷・刊記



医術に対する関心の高かったことがうかがわれる。ただこれらの古医書に横本の書形は見られず、その書形が一般的に見られるようになるのは寛永年間（一六二四〜一六四四）である。和田恭幸氏によれば『万病回春』という本は江戸時代に数回出版され、慶長十六年（一六一一）刊、元和六年（一六二〇）刊の古活字版では通常の大本であるが、寛永六年（一六二九）刊で製版本になると同時に横本に変わる。同様のことが『薬性能毒』の諸版にも見られ、慶長十三年刊は古活字版だが以後の寛永頃刊の製版本は全て横本形に変わっていくとのことである。和田氏は横本が医者業務の実用性の上に改変されたのではないかと述べている。〔注3〕そこでこの本が慶長年間に刊行されたものであるなら製版本であること、またその横本という書形の面からも極めて珍しい本が出現したことになる。しかも端本とはいいながら題箋もほぼ完全な形で残り、保存状態も極めてよい。書誌的な面から大きな興味に駆られとにかく購入する事にした。その後最近に至って、幸運にもこの本の中、下巻を同時に入手することが出来、三冊揃った状態で全体の構成、内容等も研究・考察することが可能となった。

三冊の本の書誌を記すと、上中下巻ともに縦十二、九センチ。横は上・中巻が十九、二センチ、下巻が十九、三センチ。四周単辺、無界十四行。上巻と中巻は表紙がかなり痛んでいる。下巻は上中巻に比べると痛み方が少なく比較的きれいな状態を保っている。題箋は摺り題箋で三冊ともにしっかりと貼りついている。そしてこの本の上巻の最終丁には

慶長十三申戌年正月十九日

鷹取甚右衛門尉藤原秀次

とあり、中巻の最終丁には

慶長十五年三月十五日 藤原秀次

とあることも分かった。各冊それぞれに刊記が存在していること、またそれが二年という比較的長い間離れているのも不思議だと思ったが、それよりもそれぞれの年号が各巻の出版された年だとすれば、慶長十一年と記された下巻が最も早く刊行されたことになり、出版の順序に逆転現象が起きていることになる。そこでこの本の入手

状況から筆者のところ集まった三冊は、繰り返し出版された時期の異なる端本によって構成される、所謂「入れ本」（補足本）であると一時は考えた。それは例えば前記の医書の例や、嵯峨本『伊勢物語』が数度にわたり刊行された例もあるからである。「注4」しかし出版事業の揺籃期ともいえる江戸のごく初期において、繰り返し出版されることはやはり稀なことである。それならば何らかの事情で下巻が最初に刊行され、その後上・中巻が刊行された、と考えるべきなのか。その事情とは何であろうか。またそれぞれの刊行年が二年ずつ離れていることも気になる等々、三冊を一度に入手出来なかった事がかえって深い疑問を抱きかけとなった。その疑問を解き明かそうと調査を進めるに従い、従来考えられていることと異なる事実や新しい事柄がいくつか判明してきたので、今回この機会に発表するにしたい。

『外科細壺』の書誌的な調査に入る前に、この本が古医書の中でどのような価値を持ったものなのか、またこの本の著者である鷹取甚右衛門尉藤原秀次がどのような人物であり、どのような業績を残したのかを簡単に述べることから始めたい。

〔注1〕 本の正式な書名を題箋からとるか内題からとるかは現在書誌学の世界では議論が分かれている。筆者は題箋を重視する立場をとったが、『外科細壺』については内題にある『外療細壺』の名称で呼ばれることも多く、一定してない。本の書名が確定できないことは何とも歯がゆい思いを抱くのだが、和本は題箋が剥がれやすく、それを欠くものはきわめて多い。そこで内題から採るべき、と言う意見も出て来るのだが、題箋の名称と内題とが異なることは少なくない。そのため同一の本でも異なる題名を持つ和本も多く、検索の時にしばしば不便を生じることになる。しかし今回の調査を通して、どちらの立場をとるかは確かに難しい問題であるということを実感している。このことに関しては後で触れる。

〔注2〕 川瀬一馬『増補古活字版の研究』下巻「古活字版刊行記集」昭和四二年

〔注3〕 和田恭幸『江戸文学と出版メディア』「近世初期刊本小考」二〇〇一年 笠間書院

〔注4〕 前記 川瀬一馬『増補古活字版の研究』第二編第七章・第二節「嵯峨本の刊行」

一 鷹取流外科

南北朝時代から室町末にかけて、国内の諸所では戦いが頻発した。当然のごとく多数の人々が太刀や矢尻、鉄砲等の金属製の武器によって負傷したが、前時代よりも発達したそれらの武器は、戦闘者に以前の戦いでは見られぬような深刻な傷（金瘡）を負わせた。手遅れで死に至る人々も続出したに違いない。必然的に適切な実践的な外科医による手当が要求され、その要請に応じて多くの外科術（金瘡術）の流派が輩出した。その人々を金瘡医と呼んだが、中には十六世紀中頃、宣教師ルイス・デ・アルメイダによってもたらされた、南蛮流外科術というものも存在した。これは豊臣秀吉のキリスト教禁令の中で弾圧され衰亡してしまつたという。

これらの外科術の中でも特に鷹取秀次の始めた鷹取流外科術は、それまでの外科術が隋や唐の医書からの抄出を基にしたのに比べ、自分の経験を重視する実践的なものであつた。この鷹取流外科術の全貌を知る手段としては二冊の医書が知られている。それが『外科新明集』と今回考察の対象となる『外科細壺』である。『外科新明集』の序文にはその二著に関して次のような記述がある。

外科新明集序

外科新明集ハ播州ノ住人 鷹取甚右衛門尉藤原ノ秀次公ノ集ル書ナリ 外科ニ志アル者ハ一日モ此書ナクンバ 治ヲ施ス事勿レ 秀次公少年ヨリ外科ニ志シ治ヲ施ス事挙ゲテ数ヘ難シ 既ニ七十五歳ノ春細壺 新明ノ二部ヲ編テ 土師四郎右衛門尉藤原ノ吉房ニ付與ス 吉房公モ亦外療世ニ勝タリ 然則バ後世百卷ノ外科書ヲ持ス トモ是新明ニハ尤モ劣ベシ 懷中ニ秘藏シテ他見スル事勿レ

慶長十五年 仲秋日 井上宗庵敬書

（本文は刊本として最も古い寛文八年（一六六八）の刊記を持つ中村五兵衛版による。順天堂大学蔵）

『外科新明集』の本文は漢字カタカナ交じりで、順天堂大学蔵の寛文版『外科新明集』は横本仕立て、縦十二センチ、横十九センチ。四周単辺、無界十四行、上中下の三巻。題箋は残っていないが『外科細壺』に類似した形状を有している。内容は上巻が病論で金瘡を含む種々の病気の分類。中巻は薬方で各薬の処方。下巻は薬性で種々の薬の効能が整理され全体が体系的にまとめられている。両書を比較してみると『外科細壺』は『外科新明集』と重複するものも多く、その続編であり新明集の補足といった感もある。まさに細壺（細かく切り込みをいれる）という名称が内容を物語っているといえよう。

さて、この序文だが、初めの部分に「……秀次公ノ集ル書ナリ」という一文がある。その意味するところは秀次が自分の経験を通して良いと判断した治療法を集めたということであろう。そしてその次に「既二七十五歳ノ春細壺 新明ノ二部ヲ編テ 土師四郎右衛門尉藤原ノ吉房ニ付與ス」とあることから、序文の日付にある慶長十五年の仲秋日（八月十五日）より以前に「細壺 新明」の二書は完成していたと読める。その時期がいつのことなのか具体的な記述はないのだが、『外科細壺』の中巻最終丁に慶長十五年三月十五日とあるので、右の序文の仲秋日までの五ヶ月の間に両著が完成し藤原ノ吉房に与えられた、とも考えられるであろうか。ただ土師四郎右衛門尉藤原ノ吉房がいかなる人物であるのか、さらに井上宗庵が秀次に代わりどのような立場でこの序文を記したのかは不明である。これらの人物関係について疑問点は残るが、序文からは鷹取秀次が少年の頃より外科に志し、治療経験も豊富で実践的な外科術の達人であったということのほうがわれる。つまり先に述べた人々の要請に答える充分な力を持っていたことになる。今までの金瘡術に比べ、具体的に実践的な手当てが行なわれたのである。七十五歳の折りそのような体験を踏まえて前記二書が編まれた。この序文では『外科新明集』が主となっているが、二冊がセットになつて鷹取流の全体像を知ることができるということである。

秀次の生没年に関しては不明とせざるを得ないが、酒井シヅ氏は新明集の序文に慶長十五年仲秋（八月十五日）とあることから、この慶長十五年に秀次が七十五歳と考えれば、生年はそれより七十五年前の天文五年（一五三六）頃にならうと推測されている。〔注一〕

次に諸本の調査の結果判明した『外科細壺』の二種類の異本について述べることにしたい。

〔注1〕酒井シツ著『日本の医療史』一八五頁 昭和五七年 東京書籍株式会社

二 『外科細壺』の異種本に関する書誌

「はじめに」で筆者が疑問を呈したことは、『外科細壺』の本来の姿を知ることによって解決するであろうと考え、まず各地に蔵される『外科細壺』を見つけ出し調査することから始めた。その過程で、『外科細壺』の上巻・慶長十三年、中巻・慶長十五年、下巻・慶長十一年の各年号は全ての本に共通して存在することが判明した。それは先に述べたように、出版順序に逆転現象が起きていると同時に各巻の出版にそれぞれ二年間も要したことを意味する。従来の医学史の研究者の間では、このことはあまり問題視されることもなかったらしく、富士川游氏はその著作の中で「慶長十三年（一六〇八）刊行の『外科細壺』に当時金創に処する方を列挙せり」と記し、また「『外科細壺』は慶長十一年乃至十五年に成り、これには治術と薬方を挙ぐ」〔注1〕とも記すことから、疑問を抱かず前記の年号をそのまま各巻の刊年と考えていることが分かる。また『外科細壺』を所蔵する各図書館はこの本をいずれも貴重書、あるいはそれに準ずる扱いをしているが、その理由として富士川游氏が考えていたように、慶長年間出版の古版本であることを理由としているようである。例えば京都大学付属図書館に『外科細壺』のことを問い合わせたところでも、図書館に貴重書指定基準というものがあり、寛永以前に印刷されたものがこれに当てはまるとのことである。そのため現物のコピーを送ってもらうことも簡単には出来なかったが、幸い貴重書として扱われるが故に、京都大学に所蔵されるうちの一本はインターネットで表紙から始め、その全丁を閲覧することが可能となっている。その結果上、中、下巻三冊とも家蔵本と全く同種の本であることが確認できた。

各図書館、研究機関の担当の方々によるご協力もあって次の諸本の存在を現在までに確認し、調査することができた。

- 九州大学付属図書館医学分館
三冊合本 題箋無し
- 杏雨書屋 四部
三部 三冊合本 題箋全て無し
- 京都大学付属図書館富士川文庫
一部 三冊本 題箋(上・中巻のみ有り・下巻無し)
- 京都大学付属図書館
一部 三冊合本 題箋無し
- 日本文化研究センター
三冊本 題箋有り
- 財団法人研医学会図書館
三冊合本 題箋無し
- 千葉大学付属図書館亥鼻分館
三冊合本 題箋有り
- 家蔵本
三冊本 題箋無し
- 家蔵本
三冊本 題箋有り

以上十一本である。〔注2〕

これらの諸本の調査を進めていくうちに、『外科細壺』には出版書肆を異にする二種類の本の存在が明らかになった。「はじめに」でも述べたように、家蔵本の書肆名は

《寺町通松原上ル菱屋治兵衛》

であったが、もう一種類の本は

《寺町二条下ル 中村五兵衛》

という書肆名になっている。それぞれの書肆名に従って前記の本を分類すると次のようになる。

菱屋治兵衛版【以下、菱屋本と呼ぶ】

杏雨書屋本一部 (題箋 無し)

京都大学本二部 (題箋 有り)

研医学会本 (題箋 有り)

家蔵本 (題箋 有り)

中村五兵衛版【以下、中村本と呼ぶ】

九州大学本 (題箋無し)

杏雨書屋本三部 (一部「上中巻のみ題箋有り。下巻無し」・残り二部題箋無し)

日本文化センター本 (題箋無し)

千葉大学本 (題箋無し)

次に「中村本」の代表として千葉大学本、「菱屋本」の代表として家蔵本を用い、両者の校異を行った結果、両者の間には大小さまざまな異同のあることが明らかとなった。上巻からいくつかその例を抜き出してみよう。(注・菱屋本は異なる箇所だけ記す。なお傍線部は、異同箇所が分かりやすくなるよう筆者が付けたものであり・は異本の対応箇所が存在しない部分である)

上巻【一丁表】

(中村本) フツグサウ 佛下山ノ霜三分白物一分是ヲ能ク練リ合セテ置ク

(菱屋本) イツレ 何モ

この箇所では中村本を読むと、「能ク練ル」のは「白物」だけでも読めてしまうが、菱屋本では「佛下山」と「白物」の「何(いづれ)モ」を合せて練るのだと理解され、誤読の可能性はなくなる。文中にある「霜」というのは薬種を黒焼きにしたものである。

(中村本) 髪ノ毛ヲソリテ 十文字ニ頭ヲハリ・厚キ紙ニ付ツクルナリ

(菱屋本) 針ニテヤブリ

中村本の「頭ヲハリ」とは「頭ヲ針」の意か。これでは説明が足りず治療にも困ると思われる。菱屋本では手術道具の「針」とそれをどう使うのかも明確になっている。

【一丁裏】

(中村本) 硫黄二分 ユワウ 賦粉一兩 ジフン 狗瑰一兩 ククハイ

(菱屋本) 各一兩

二つの本では硫黄の分量が異なるが、中村本に比べ菱屋本は簡潔な表現になっていると言えよう。

(中村本) 髪毛ヲ カミノケ 抜痴 ヌキカサ ・ヲ コソ 胡 コソ ・ゲ去テ サリ

(菱屋本) フタヲ。コソゲ・

【三丁表】

(中村本) 頭頂ニ ツテウ 攻上 セメノボツ テカケバ。手ニ ツテウ 随ヒ。テヲ セメノボツ ヨルナリ

(菱屋本) 手モヒカレヌ程カユキナリ

中村本の「手ニ随ヒ。テヲヨルナリ」はよく分からねぬ表現であるが、菱屋本の表現は「手も止められないほど痒い」という意味が具体的に表現されていると言えよう。

【五丁裏】

(中村本) 喉ニ ノンド 喉痺ハ コウヒ 少 スロシ キナル スロシ フクラコ出テ イデ

(菱屋本) 大豆ツブ程 マ フクレ出テ ホド イデ

菱屋本は具体的な表現であるが、中村本の「フクラコ」は脹れると関係するのだろうかやはり一般的表現とは言えないだろう。

【十三丁裏】

(中村本) 葛粉クツクコ一兩石灰イシハイイレカンサウ甘中ウチコウコウサイ各分右綿ニ包ミ打洪ウチコウコウサイ々細ニセヨ

(菱屋本) スリツケヨ・・

中村本の表現がそれほど耳慣れたものでないのに比べ、菱屋本は簡潔で具体的だといえよう。

【十四丁表】

(中村本) 榆ニレノ木ノ穴アルミツニ有カハラケ水アルミツヲ土器カハラケニウズメサイサイベキアラフ細々サイサイベキアラフ可洗ナリ

(菱屋本) 入レテ

【十五丁裏】

(中村本) 蜂ハチノサシ痛ナマイモニハ生芋ナマイモノ茎ノ汁ヲ付ケヨ無クハ根ヲホリテ・・

(菱屋本) 付ケヨ

【十六丁表】

(中村本) 寒カンニコシケテ死シニタルヲハ

(菱屋本) コ、へ

中村本の「コシケ」は「腰氣」であろうか、ここでは全く意味が通らない。菱屋本の「ココへ」は「凍へ」である。

【十八丁表】

(中村本) 髪ノ油ニテ付ケヨ亦破ヤブレモ・ス赤ク血浮チウキテ痛ムニハ

(菱屋本)

ヤフレ
破・モセス

ここでも中村本では意味が通らない。菱屋本の「破れもせず」で初めて前後の文意がすつきりする。

このように中村本では言葉の意味するものが判然としないものや、意味不明な箇所が、菱屋本では分かりやすくかつ具体的な表現に変わっている。また病名も例えば、中村本の第一丁表の「禿瘡」には「トクサウ」とルビが振ってあるが、菱屋本では「シラクボ」、二丁裏の「顔瘡」には「ガンソウ」とルビが振ってあるが、菱屋本では「カサ」とあり、四丁裏「鼻臑」に中村本では「ビラウ」とあるのが、菱屋本では「ハナノヤマヒ」とあるように、漢語表現を分かりやすい和語に換えている。句読点のような小さな違いまでいれるとその数は無数といってもよいほどあるが、文意が変更される程度の比較的大きい異同は、上巻の本文二四丁に約七三箇所、中巻十七丁に三一箇所、下巻三〇丁に七七箇所とかなりの数にのぼる。これらの異同部分を点検して行くと、全体的に中村本での表現を菱屋本が訂正、補強し、かつ分かりやすい表現に変える傾向が見られる。これは明らかに中村本が原形つまり初刷本であり、菱屋本はその版木に埋木（入れ木）による修正を大幅に加えた重版本であると考えてまず間違いない。それを証明するように刷りの面からいっても菱屋本は中村本に比べ版面が全体的に傷んでいる。そして下巻の刊記にある書肆名の部分は、「中村五兵衛」とある匡郭（欄脚）の下辺部分が菱屋本では亀裂を生じ、大きく線がずれて明らかに「菱屋治兵衛」の書肆名が埋木されていると分かる。また両者の題箋の有無については先にまとめたように菱屋本の題箋は比較的よく残りいづれもしっかり糊付けされているが、中村本にはほとんど残っていない。しかも調査の過程で中村本は題箋だけでなく、元表紙を保持しているものもほとんどない。これも菱屋本より古い成立であることを裏付ける資料の一つとなろう。中村本では杏雨書屋所蔵本の一本だけに題箋が残っているが、写真撮影を依頼し確認したところその上巻にはわずかに題箋が残り、中巻にも存在している。しかし肝心の下巻には題箋が全く残存せず、詳しく内容を調査してみないと中村本に題箋が存在していたと言いつけるには不安が残る。このことは和本の題名を内題から採るか、それとも題箋から採るのかという書誌学上の問題に発

展する可能性がある。つまり『外科細壺』という題箋があつたのは菱屋本だけの可能性があり、初刷本の中村本にどのような題箋が存在したのかを確定するだけの材料はほとんど残っていないので、本来にこの本の題名を『外科細壺』としていいのか不安が残ると言うことである。このことについてはなるべく早い時期に調査をし、その結果を別の機会に発表したいと考えている。

これらの事実を合せ考えてみると、最初中村五兵衛から出版された『外科細壺』は、ある時点で菱屋治兵衛にその版木が移動し再出版されることになり、その際大幅な改訂が加えられたと考えるのが妥当であろう。江戸時代に版權のことを「板株」というが、何らかの事情でその譲渡が行われたと考えるわけである。ただし先に引用した和田氏の研究によれば、このような譲渡が慶長年間に行われていた事実は無いということである。〔注3〕

ここに『江戸時代書林出版書籍目録集成』〔注4〕という本がある。この本は寛文以降に出版された江戸時代の書籍目録をほとんど集めたもので、まず寛文六・七年頃（一六六六・七）出版と推定される無刊記本をはじめとし、寛文十年刊、寛文十一年刊、延宝三年（一六七五）刊等の書籍目録が収録されている。注目すべきことは、『外科細壺』と『外科新明集』の名は、無刊記本の医書の部一八一種中には記載されていず、寛文十年刊の医書二四七種の中に初めて登場し、以降の書籍目録の中には必ず両書名がほとんど同じ位置に並んで載っていることである。『外科新明集』の最も古い刊本は先に引用した「寛文八年 中村五兵衛」の刊記のあるものなので、『外科新明集』が寛文十年の書籍目録から記載されることは極めて自然なことと考えられる。では何故慶長年間出版と考えられた『外科細壺』の記述が無いのか。何らかの事情で無刊記本の書籍目録から欠落したのだろうか。ここで注目すべきことは『外科細壺』の内容を点検してみると「新明二方ハ在リ」・「皆新明ニ有之」のような『外科新明集』を先行文献とし、依拠する表現が上巻に六例、中巻に一例、下巻に二例というように何度も出て来る。これはもともと『外科細壺』が単独で存在していたのではなく、明らかに『外科新明集』が先行して存在していることを前提とした表記である。つまり『外科細壺』の刊行年は、刊本として最も古い寛文八年の『外科新明集』より少し遅れた頃か、またはほとんど同時と考えざるを得ないのだ。そう考えてみると両者ともに同じような大

きさの横本で、しかもどちらも中村五兵衛の出版であったこともごく自然に納得されてくる。

それでは上中下それぞれの巻に記されていた一見刊記と思われた年号は何であったのかというと、それは『外科新明集』の序文に記された、鷹取秀次がその年々に自分が良いと判断した治療方法を集め、記録した年と考えるのが最も合理性があると考ええる。その根拠となるのは、中巻七丁表の「三一 丹毒搔針」という記事に続き「慶長十四年己酉 鷹取甚右衛門尉藤原秀次」という年号が巻末でもないのに存在していることがまず挙げられる。

次に中村本の下巻十三丁表には「三三 金瘡二十二運」という記事に続き、「慶長十一季丙午十月三日 鷹取甚右衛門尉藤原秀次」という年号が記される。中村本では何故かこの後が「三五 膚守」という記事が続き三四にあたる記事が欠落している。菱屋本ではその矛盾を解消するために、この「慶長十一季丙午十月三日……」という記事を削除し、代わって「三四 疵瘡療治代々明方ノ事 是レヨリ左ニ見エタリ」という記事を挿入して形だけは整えようとしている。また同じ下巻の十八丁裏「四九 新命丹」の記事の後にも「天正九年己巳十月二日 藤原秀次」の記述があり、これはどちらの本にも見られる。つまり『外科細壺』にはもともと天正九年、慶長十一年（二箇所）、慶長十三年、慶長十四年、慶長十五年の全部で六つの年号が本文中に記載されているのだ。そしてそれらは『外科新明集』の序文にあった「……外科新明集ハ播州ノ住人 鷹取甚右衛門尉藤原ノ秀次公ノ集ル書ナリ」という一節に符合してくると考えられる。出版当初の寛文期の人々は、本を手にした時約六〇年もさかのぼる慶長年間の出版物だと誤るはずもなく、まして『外科新明集』とセットで購入したであろう人はこの年号を刊年とは思わず、正しく鷹取秀次が治療方法を収集しまとめたそれぞれの年と理解していたはずである。前述したごとく江戸時代の出版書籍目録にいつも並ぶような位置に二書が併記されていたこと。また『外科新明集』の序文には、「細壺 新明ノ二部ヲ編テ土師四郎右衛門尉藤原ノ吉房ニ付與ス」とあり、『外科細壺』が『外科新明集』を先行文献として盛んに引用していたこと等から、両者は一まとまりの書籍と意識されていたことは充分にあり得る。そう考えると『外科新明集』の刊記にある寛文八年が『外科細壺』の刊年をも表わしたので、『外科細壺』からは刊記としての年号は省略されたという可能性も出てくる。

ここで両書の出版された年を確認するため、中村五兵衛と菱屋治兵衛がいつ頃活躍した書籍商なのかという出版書肆の面から再検討しておこう。

〔注1〕『富士川游著作集』1 昭和五五年 思文閣出版

〔注2〕『東洋文庫』・『玉川大学』にもそれぞれ『外科細壺』の上巻のみが所蔵されている。また順天堂大学医史学科所蔵の『外科新明集』上中下巻（寛文八年刊）のうちの中巻が、実は『外科細壺』の中巻であることも報告しておく。

『外科細壺』と『外科新明集』の密接な関係を示すものといえようか。

〔注3〕前記「近世初期刊本小考」

〔注4〕『江戸時代書林出版書籍目録集成』慶応義塾大学付属研究所斯道文庫編 一九六二年 井上書房

三〈書肆〉 中村五兵衛と菱屋治兵衛

江戸時代のそれも初期の本屋については実はまだ分からないことが多い。この研究にはきわめて地道な作業を要求され、先学の貴重な研究もあるにはあるがまだそれも充分とは言えない。先の調査で中村本こそが初版本（初刻本）であり、菱屋本はその重版本であることが判明したので、まず書肆中村五兵衛について現在までに分かっていることを述べる。『改訂増補近世書林板元總覧』〔注1〕によれば、堂号は桐華堂といい、日蓮宗の仏書が多いという。この本屋については、今のところわずかに朝倉治彦氏の言及があるにすぎない。〔注2〕それによると寛永十七年（一六四〇）の刊記を持つ『あだ物語』大本二冊が今のところ最も古い同書店の刊行物と考えられるようだが、その所在地は『御池通俵屋町』となっている。つまり慶長年間の出版については確認できず、恐らく書籍商としての中村五兵衛はまだ存在していなかったということである。この書店の実際の活動は正保・慶安（一六四四〜一六五二）のころから始まり、下限は元禄期であろうという。寛文期の出版物を前記の朝倉氏の調査と矢島玄亮氏の調査したものを合わせてみると、〔注3〕

- 寛文二年 妙正物語 大本、一冊
 寛文五年 ほうまん長者 大本、一冊
 同 聚分韻略 五卷
 同 増補三重韻
 寛文七年 水鳥記 大本、二冊
 寛文八年 闕疑抄
 寛文九年 柿本備材抄 大本、三冊
 同 格致余論

などが判明している。ここに寛文八年刊の『外科新明集』横本三冊が入り、ほとんど同時期に『外科細塹』三冊も入ることになるはずである。恐らくこれ以外にもかなりの出版物があったと推定され、寛文期の活発な出版活動が浮かび上がってくる。

菱屋治兵衛については、前述した『改訂増補近世書林板元總覧』によれば、堂号を福寿軒、宜風坊書林とある。また、菱屋治兵衛については藤川雅恵氏の比較的詳しい論考がある。^{〔注4〕}そこに寛文期からの菱屋板行の出版物が記されている。

寛文十一年『和漢朗詠集』（西生永斎・北村季吟）

貞享 五年『役行者縁起』（浅井了意）

元禄十二年『狂言記』

元禄十三年『十能都鳥狂詩』（青木鷲水）

元禄十四年『露五郎兵衛新はなし』（露五郎兵衛）

菱屋は寛政期（一七八九〜一八〇一）に入ると大きな本屋に成長するが、寛文期にはまだ書肆としても創業段階で出版点数も少なく、中村五兵衛が本屋としての活動を終息していく元禄期（一六八八〜一七〇四）あたりから

やっと本格的な活動を始めていえるよう。出版書肆という観点から見ても中村五兵衛が先行し、菱屋治兵衛がその後を追うという形が見て取れる。

以上のことから、初刷の書肆である中村五兵衛は慶長年間にはまだ存在せず、『外科細壺』の発行を慶長年間とするのは出版書肆の観点からも誤りであることは明らかとなった。また菱屋治兵衛は中村五兵衛よりも本屋として遅れて発展するので、売れ筋の出版物の権利を譲り受けたのではないかという今までの考えを補強することになる。中村五兵衛版の『外科細壺』の刊行は、寛文年間の『外科新明集』とほとんど同時期という推定はまず間違いないと考えられる。

ところで、ここに一つの資料がある。明暦二年（一六五六）に刊行された『笑ひ草』という本の中に次のような一節がある。

ある人にはかに薬師を心がけ、医書どもを集め、そろそろ読みて、合点のゆかぬ所には付け紙を付ける。
女房これを見て其の紙はなぜに付けさせらるるといふ。男聞きてこれは不審紙とて合点のゆかぬ所に付けて後に師匠に問ふために付ける。

（注 適宜読みやすいように漢字を用い、句読点を補った「希書複製會」昭和六年刊）

この記述から、明暦年間前後の人々の医師に対する認識の一端がうかがえ興味深い。この当時医師を志す人々は比較的容易に医書を手することも可能であったようだが、その内容については一般の人には難解なものも多かったようだ。それは医書の需要が増えたことを意味すると同時に、より使いやすく、分かりやすい医書への要求が高まっていったことが当然考えられる。そこから『外科新明集』、『外科細壺』の二書の書形が横本であり製本本であったことも辻褄があってくる。横本はその至便性から採用された書形だということは先に和田氏の説を引用した。つまり『外科細壺』が横本であり、製本本である理由は、それを利用する人々が一部の特権階級ではなく、多数の庶民階級にまで広がっていたことを意味するのではないか。また重版本である菱屋本がいつ頃出版されたか定かではないが、難しい表現や漢語を分かりやすく書き換えていたのは、購買層の底辺が広がり、その

ための多くの需要に答えようとした結果であろう。慶長年間の古活字版は少ない需要に應ずるには極めて適した出版方法であったと言われる。いま中根勝氏の『日本印刷技術史』を引用し活字本から製版本への歴史を再確認しておこう。

古活字版も学問の普及、読書人口の増大、刊行種目の多岐にともない、増加する需要に技術的に応じきれず、寛永後半ころから次第に製版印刷が復活していった。当時活字版が印刷方法の主流となったのは、活字版が新技術であったこと、摺刷部数の少ない小規模の印刷方式として、経済的であったことなどによる。初期は印刷部数の単位は百部以下がほとんどであった。組版は一丁ないし二丁単位で植字し所要部数を摺れば解版し、ついで次の丁を組版、印刷、これを繰り返して、全丁の印刷が終わる。従って繰り返し使用できる活字類・組版用具は少なくよく、製版に比して経済的である。製版は全丁を一ないし二丁の単位で一枚板に彫版し、これを保存する必要がある、その経費は多額となる。しかし製版は印刷部数の多いもの、再版を要するものには適切な技法であった。〈傍線部筆者〉〔注5〕

『外科細壺』の横本、製版という形は寛文年間の人々の要請に呼応したものであり、時代が下るにつれて人々はより一層分かりやすく、日々の生活に役立つような医書を求めるようになったと考えられる。おそらく菱屋治兵衛はそういう人々を念頭において『外科細壺』の重版本の出版を企てたのではないだろうか。

〔注1〕井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』改訂増補近世書林板元総覧 日本書誌学大系七六 平成十年 青裳堂書店

〔注2〕朝倉治彦『近世文学 作家と作品』「私の書賈集覧」中村幸彦博士還暦記念論文集刊行会編 昭和四八年 中央公論社

〔注3〕矢島玄亮『徳川時代 出版者 出版物 集覧 続編』昭和五一年 万葉堂書店

〔注4〕藤川雅恵『江戸文学と出版メディア』「鷲水浮世草子の特質とその板元・菱屋治兵衛との確執をめぐって」

二〇〇一年 笠間書院

〔注5〕中根勝『日本印刷技術史』平成十一年 八木書店

四 結語

最後に以上考察してきたことを総合して、結論を導き出すならば、『外科細壘』の成立年代は寛文年間に『外科新明集』とセットで中村五兵衛によって出版されたと考えることが、諸事象を最も矛盾なく説明できるということである。上中下それぞれの巻に記されていた慶長および天正のそれぞれの年号は、鷹取秀次がいろいろな治療方法を集めまとめた年と考えるべきで、刊行の年と考えることは誤りである。しかし時代を経るに従い、ちょうど巻末に位置するものもあることから、慶長という年号がいつの間にか刊記と読み誤られるようになり、現在『外科細壘』を所蔵する図書館、研究施設でこの本を慶長年間に出版された古医書として扱うようになってしまっている。当然それは誤りであると同時に今回の調査で『外科細壘』には二種類の異本が存在していることが明らかになった。『外科細壘』を引用してものを言う場合、本文に読みづらい箇所を抱えているとは言いながら、鷹取流外科術の内容をよりよく伝えていくのは後世の手が加えられていない中村本である。厳密に研究を行うためには必ず中村本を主とし、菱屋本を従としなければならないと考える。

二種の異本については、いつ頃菱屋版が出版されることになったのか、そして版本木（今で言う著作権）がどのように譲渡されたのかという大きな問題が残るが、恐らく菱屋治兵衛は新興の本屋として、当時売れ筋の医書の版本を中村五兵衛から譲り受け、その版本に大幅に手を入れて重版本として売り出したものと考えられる。現在『外科新明集』の版本で確認されるものは三種類ある。それをまとめると次のようになってい

寛文八年版（一六六八） 寺町通二条下町 中村五兵衛

正徳六年版（一七一六） 京都 栗山宇兵衛

明和九年版（一七七二） 大阪 心齋橋南四丁目 吉文字屋市兵衛

今までの調査ではつきりしたことは『外科細壺』と『外科新明集』は二冊セットになることで鷹取流の外科術を伝えるものだというのだが、右の三種類の出版書肆に菱屋治兵衛の名はない。となると何故菱屋治兵衛が『外科細壺』だけを単独で出版したのかという疑問が残るわけだが、このことに関しては現在までの調査では不明とせざるを得ない。江戸時代の出版事情についてより深く踏み込んでいく時にその答えが見つかるのではないかと考える。

以上、いくつかの課題があらたに付け加わり、問題の在り処はより深化したともいえるが、今回の稿はここままで一応の区切りをつけ後日を期したい。

最後にこのような拙い調査報告ですが、多くの皆様のご支援でとにかく日の目を見ることが出来ました。特に、高等科の司書中村清子さんには本当にお世話になりました。中村さんのご尽力の賜物で出来上がった調査報告であるといっても過言ではありません。また千葉大学医学部猪鼻分館の図書館の方々にも大変お世話になりました。おかげさまで異本『外科細壺』の姿を確実に把握できました。その他、九州大学付属図書館医学分館、京都大学付属図書館、日本文化研究センター、杏雨書屋、財団法人研医学会図書館、順天堂大学医史学科の各図書館、研究機関にも大変お世話になりました。ここに厚くお礼を申し上げます。